



1 れんがのまち江別。最盛期には15もの工場があったが、現在は北海煉瓦合資、米澤煉瓦、昭和窯業の3工場が稼働するのみ。米澤煉瓦の倉庫には、常時100万本ものストックがあるという。最近では、道庁赤れんがの煙突部分の補修に、このれんがが使われたとのこと

3 れんがをカッターで断裁するこの道5年の吉田氏。先輩たちの熟練の技にはかなわないが、細かな指示なしでも一通りの仕事はこなせるまでになった。仕事は楽しいという

吉田 裕二／よしだ ゆうじ 1984年、札幌市生まれ。2001年、江別市の「(株)富山レンガ施工」に入社。無我夢中で作業をこなすうちに、れんがの魅力に深く、強く惹かれる。こつこつとまじめに仕事に励む姿勢に、社長や先輩たちからの評価が高く、今後の成長が期待されている。休みの日は、大好きなロックを聴いたり、スポーツジムで汗を流している。

挫折を感じるたびに いろいろな人たちに 支えてもらった

ときの感激の大きさがにじんている。以来、ますますれんがに惚れ込んでいく。二つひとつを積み上げるたびに、「きれいに、きれいに」と心でつぶやきながら、丁寧に仕上げている。

「何度もやめようと思いましたが」といまは屈託なく語る。

肉体的、時間的な大変さに加え、なかなか思うように技術が上達しないもどかしさを感じたり、仕事上の失敗に悩むことも多いという。それでも、いろいろな人たちに支えてもらいながら続けることで新たな自信が生まれ、前へ進むことができた。

先輩たちはアドバイスはしてくれ、ものの、手取り足取り教えてくれるわけではない。ベテラン職人たちの技を現場で見ながら、体得していくしかないのだ。志望しながらも、挫折していく若者も多い。江別市のれんが職人は年々減ってきている。

作業を一通り習得するのに、5年はかかると言われている。吉田氏は、今年でその時期を迎える。

「二人前なんて、まだまだですね。この道30年の職人の技は本当にす

ごい。早くて、魂がこもっている。知識も豊富。少しずつでも近づきたいと思っています」

「ありがとう」 その一言が 何よりもうれしい

れんがに関わっていると、とにかく楽しいし、充実していると言おう。一つの建物が完成したときの喜び、達成感が深く胸に刻まれ、この仕事を続けていくことに迷いはなくなった。

「れんがの建物は、重厚感があるて、凛としているのにやさしい。時間や天候によって微妙に表情が変化するでしょ？ いくら見ているも飽きないんです」

若き職人は、少し照れながらもれんがの魅力を熱く語る。住宅ができあがったとき、これからそこに住む人たちに「ありがとう」と言われるのが、何よりもうれしい。

「れんがの魅力をもっと多くの人に知ってほしい。いまは外国産のれんがも多いけど、僕にはやっぱり江別のれんがが、しつくり手になじみます。そんな違いをわかっただけに、いい仕事をして、人の心に残る建物をたくさん造りたいんです」

ほとんどの作業を一人でこなせるようになったいま、自分がやりたいこと、やるべきことが随分見えてきた。育ててもらったことへの「一番の恩返しは、たくさんの方を吸収して早く一人前になることだと自分に言い聞かせている。作業する横顔に、職人としての信念と誇り、そしてれんがに対する深い愛情が交差する。

人生というれんがを積み上げる吉田氏の手には、淡い春の光が降り注ぐ。



江別のれんが
開拓使は工場と倉庫の建設用として、また寒冷地の建物として、れんが建築を奨励した。これにより明治から大正期にかけて、れんが建築が道内に普及し、この時期に数々の名建築が誕生した。大正期以降、道内のれんが製造は現在の江別に集約され、道内最大のれんが製造地帯を形成。旧肥田製陶の煉瓦工場が往時の繁栄を伝えている。